プロジェクト1

子どもの身体リテラシー向上プログラムの開発

相澤 勝治（経営部教授）、木村 元彦（専修大学スポーツ研究所協力研究員）

「子どもの身体リテラシー開発プロジェクト」は、スポーツを通じて「身体リテラシー」を発達させることができるプログラムを、科学的知見を基に開発するプロジェクトである。また、「身体リテラシー」とは、さまざまな身体活動、リズム活動、スポーツ活動などを自信をもって行うことができる基礎的な運動スキルおよび基礎的なスポーツスキルである（日本陸上競技連盟, 2018）。身体リテラシーを高めるためには、身体活動を支えるための体力・運動能力、運動に対する自信である運動有能感、運動スキルのひとつであるコーディネーション能力を高めることが重要である。さらに日本陸上競技連盟は、スポーツが人間の生涯にわたる身体活動の基盤となる身体リテラシーを育むことを報告していることからも、児童期から身体リテラシーが発達する取り組みに参加することは、本邦が抱える運動習慣の二極化や運動嫌いの子どもの増加に歯止めをかけるきっかけになると考えられる。

研我々はこれまで研究協力者とともに、レスリング競技が発育発達期の子どもたちの体力・運動能力、学校体育に対する運動有能感や運動習慣にどのような影響を及ぼしているかを中心に研究してきた。その結果、レスリングに取り組む少年少女たちの体力・運動能力は、中学年（小学3・4年生）から性差が現れることや、体力・運動能力の発達特性は性差の可能性があることが明らかになった（木村ほか, 2017；木村ほか, 2021）。また、レスリングに取り組むことが、レスリング以外の競技に取り組む児童やスポーツや運動を実施していない児童に比べて、子どもの運動有能感を高める効果があることや、体力・運動能力と運動有能感, 運動習慣を三位一体として捉えることが、身体リテラシー発達の重要なキーとなることを明らかにしてきた。しかしながら、スポーツに取り組む子どもの環境は、保護者やスポーツ指導者の影響を多くに受けることが考えられる。保護者のスポーツ経験は、子どもが取り組むスポーツの選択に影響していることや、コーチなどのスタッフの指導行動が子どもの心理面に影響を及ぼす可能性が考えられる。

そこで、本プロジェクトでは、子どもの身体リテラシー向上における影響因子を分析し、プログラム開発の基礎資料を得ることを目的とする。研究計画としては、神奈川県を拠点とするレスリング教室の選手及び保護者、及び地域特性を考慮した調査を実施する予定である。評価指標としては、身体リテラシーの評価指標をアンケートを用いて検討する。また保護者や指導者に関しては、ヒアリング調査より影響因子を抽出し、身体リテラシーの評価指標及び影響因子について分析する予定である。

プロジェクト2

昭和史に見る現代スポーツの生成過程と変遷

佐竹 弘靖（ネットワーク情報学部教授）、富川 理充（商学部教授）

研究の概要

2026年は昭和100年を迎える年である。現代スポーツの発展は日本にスポーツの概念が輸入された明治に始まり、大正、昭和、平成と時代を経て大きく発展してきた。なかでも、現代スポーツに大きく影響を及ぼしたのは昭和の時代であったことは他言を要しない。しかしながら、昭和時代は激動の時代といわれ、スポーツが発展する過程は決して順風満帆ではなかったのは歴史が雄弁に語っている。特に注目しなければならないのは、第二次世界大戦を経験した我が国において、戦前と戦後でその様相が極めて異なっている点である。

急激に変化する時代のなかで、スポーツを取り巻く環境も劇的に変化して来る。戦前では新聞、ラジオ、戦後に入るとそこにテレビが参入し、メディアがスポーツに及ぼす影響は看過できなくなってくる。しかし、戦時中の報道統制、スポーツ選手の出兵などスポーツ界にとって苦境の時代を迎える。戦後直後は、困窮の世相のもとスポーツどころではない国情にありながら日本スポーツ界はいち早く復活を成し遂げて来る。

苦しい時代にありながら、後世にスポーツを継承させるべく懸命に取り組んだ先駆者たちの足跡を追い、時代背景と照らし合わせながら調査・研究することは現代スポーツの在り方や存在意義を理解する大きな手段と考える。

これまで断片的であるが、昭和初期に活躍した選手達について執筆してきた。さらには、国立競技場の建設史や幻のオリンピックと呼ばれる1940年開催予定であった東京オリンピックの時代考証を機関紙等に発表してきた。

本プロジェクトは2026年までの4年間の継続を計画しており、初年度の今回は第1期と位置づけ、戦前・戦中のスポーツ界における陸上・野球・相撲に焦点を当て、そこで活躍し、後世に影響を及ぼした三氏（飛田穂州、人見絹枝、双葉山）を中心に、資料（国内外の研究論文、書籍、映像、新聞等）を分析するとともに、資料収集のために研究対象となる人物に関わる地元のスポーツ博物館、図書館、資料等を訪問し調査・研究する予定である。